

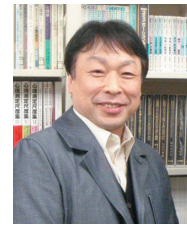


進路を決めかねている生徒への対応は？

進路指導に役立つ理論 ● ジェラットの意思決定理論

文理選択や学部・学科選択、就職企業や受験校選びなど、進路探索の中で、生徒はさまざまな意思決定を行っています。そのため進路指導では、生徒の意思決定をしっかりサポートしていくことが大切になります。そこで今回は、「決められない」「迷う」「どうしたらいいかわからない」などの悩みへの相談で基本となる「意思決定理論」を取り上げます。

取材・文／清水由佳 イラスト／おおさわゆう



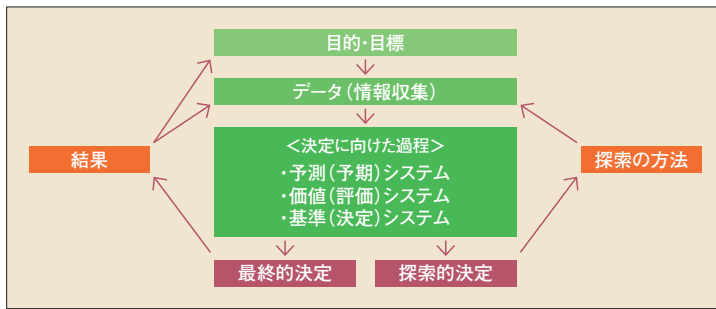
【監修&アドバイス】

会津大学 文化研究センター教授

荻間澤 勇人先生

かりまざわ・はやと ●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県の公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

図 連続的意思決定プロセス (Gelatt,1962)



長年、アメリカの教育機関におけるカウンセリングやキャリアガイダンスの臨床家として、主にキャリア発達における意思決定に関する研究を深めたのがハリイ・ジェラット(Harry B. Gelatt)です。特に、ジェラットが自身の研究前期に提唱した「連続的意思決定プロセス」と、後期に提唱した「積極的不確実性」は、生徒の進路探索のモデルとなる基礎理論としてご存知の先生も多いと思います。

「連続的意思決定プロセス」では、何を決めるかという目標を立て、情報収集を行う中で、選択可能な選択肢それぞれの結果を予測する「予測(予期)システム」と、その予測結果が自分にとってどれだけ好ましいかを評価する「価値(評価)システム」、その結果が本来の目標や目的に合っているかを判断し決定する「基準(決定)システム」という3つのプロセスで判断し、意思決定するというモデルを明らかにしました(図参照)。特にジェラットは、「価値(評価)システム」における人間が陥りやすい主観的な誤りを避けるため、客観的で実証的なデータの収集と検討の必要性を示唆しました。

この連続的意思決定プロセスは、生徒が自分なりの将来への目標や希望を決め、情報収集を行い、比較検討のうえ決定するという、進路探索の流れに当てはまります。

しかし、時代の変化とともに、こ

理論を活かす

こ ん な ケ ー ス

- ① 成績が下がり、部活との両立に悩む2年生
- ② 志望校選びの相談にきた2年生
- ③ 成績が伸びず受験校変更を考える3年生

の直線のともとれる意思決定プロセスを補う必要性を感じたジェラットは、「積極的不確実性」を提唱しました。それは、未来は予測できないもので、創造され発明されるもの。だからこそ、社会の不確かさを積極的に受け入れて、思慮深い創造性と直感、柔軟性を発揮することが意思決定には必要だと唱えました。

連続的意思決定プロセスが合理性に基づく左脳の考え方だとすると、積極的不確実性は右脳の思考を加えた意思決定プロセスと言われています。つまり、情報の取捨選択や意思決定において、合理的側面だけでなく、夢や創造性なども重要であるとジェラットは説きます。しかも、夢や目標は絶対的なものではなく、自分で情報収集し、いろいろ試す中で、少しずつ柔軟に変化させていくものだといいます。

進路探索でも、絶対的な目標をもつことが大事なのではなく、探索しながら現実とすり合わせをし、情報収集と意思決定を何度も繰り返すことが必要になるといえます。



ケース 1

成績が下がり、保護者から部活を辞めるように迫られている2年生

生徒：成績が下がっちゃって、部活なんかしているからだって親が…。それで、いい加減、受験勉強に切り替えたほうがいいから、部活を辞めるように言われたんです。

先生：一応、保護者会などでは、部活に入っている生徒は一時的に成績が下がっても、受験期になると切り替えて集中できるって説明したりしてるんだけどな。

生徒：そうなの？ 私はあと半年で引退だし、ここまでがんばってきた仲間と一緒に引退したい。

先生：その気持ち、親ともう少し話し合ってみたら？

その場だけの意思決定ではなく、連続的に継続して支えていく

このように自分のやっていることを全否定されて困っている生徒の場合、意思決定のプロセスを支えてあげるような関わり、寄り添う姿勢がまず必要になります。意思決定する瞬間だけでなく、連続的にプロセス全体に関わることが大切でしょう。そこで、多くの先生がなさっているのは、まさにジェラットの連続的意思決定プロセスの流れです。データや資料を基に考えられる選択肢をできるだけ挙げて、それぞれの選択肢が自分にとってどのような価値があり、どんな結果が想定されるかを予測していく。教師は、生徒だけでは気づけない多くの客観的な事実やデータを示し、考える後押しをしたいところです。



ケース 2

とりあえず将来は公務員かなと思い志望校選びを相談にきた2年生

生徒：志望校調査なんだけど、どこを書けばいいのか相談したくて。特にこれといって勉強したいことがあるわけじゃないし。大学に行くのも、とりあえず進学しておいたほうがいいかなくらいだし。

先生：将来やってみると面白そうと思う仕事や、興味のある職業とかはないのかな？

生徒：ああ、将来は安定した生活を送りたいから、公務員なんかはいいかなと思っている。だとしたら、やっぱり法学部？

先生：そうだな。国公立の法学部あたりだと、まあ着実に勉強は活かせると思うよ。

夢や希望を創造していけるような多くの可能性を示してあげる

ジェラットは、夢や希望・目標なども不変ではなく、創造的なものであると説きました。それと同時に、キャリアの意思決定では、夢をもつことの重要性も強調しています。「特にやりたいことがない」など立ち止まっている生徒には、自分なりの夢が抱けるような関わり方をしていくことが大切です。例えば、これまでの学校生活でその生徒ががんばっていたことや、そこで発揮していた本人も気づいていないような力を示してあげて、それにつながる可能性をたくさん情報提供することも、生徒自身が納得して夢を選び取るための視野を広げる助けになるでしょう。



ケース 3

受験を目前にして成績が伸び悩み、受験校のランクを下げたいという3年生

生徒：先生、どうしよう。この前の模試が悲惨で、このままだとまったく受かる気がしない…。

先生：でも、まだ冬休みがあるし、ここからの直前の追い込み次第というのも、実は結構あるよ。

生徒：だけど、浪人は絶対できないから。やっぱり、志望校のランク下げたほうがいいのかな？

先生：安易にランクを下げると、本来受かるはずのところまでダメになりがちだから要注意だよ。

生徒：じゃあ、同じ学校で学部・学科関係なく、片っ端から受けてみるのか？

先生：入学後に勉強がつまらないってならないか？

客観的なデータを多く示し、一緒に意思決定プロセスをたどる

不安で身動きができない生徒には、一般論での励ましではなく、自分なりの目標設定と、意思決定のプロセスが大事です。そのためには、客観的な多くのデータも不可欠です。それは、ジェラットが指摘した、意思決定のステージにおける価値(評価)システムでの人間が陥りやすい「主観的可能性(自分の興味に関連していると望ましいものと思ってしまう)」に縛られないためにも必要です。とはいえ、焦っている生徒が自分でその客観的なデータを集めて検討するというのは、なかなか難しいのも事実です。そこで、教師がプロセスを示し、一緒にやってみようという姿勢で関わるといいのではないのでしょうか。



荊間澤先生の
ワンポイントアドバイス

情報収集から意思決定を
何度も繰り返す支援が大切

キャリアにおける意思決定は、一直線にスムーズに進むことはまずありません。目標に向けて情報を収集し検討する中で、当初考えていたことは異なる事実と直面したり、自分自身の思いも変化したり。そのたびごとに元に戻り、何度でも情報収集から繰り返す必要があります。社会の変化も激しい現代では、特にジェラットが唱えた積極的不確実性は大切な考え方になります。

そこで教師が果たす役割は、「決める」ことを急がせたり、決めた事実だけを受け取るのではなく、データをたくさん示しながら時には元に戻す役割を果たしたり、繰り返し試行錯誤することを怖がらなくてよいと一緒にプロセスをたどり、支援していくことです。

せっかく入った大学からドロップアウトしたり、働き始めてもすぐに辞めてしまったりするのは、この十分な意思決定のプロセスを踏むことなく決めたことも原因の一つといえます。進路探索の意思決定プロセスは、キャリア形成における6段階、①自己理解 ②職業理解 ③啓発的な経験 ④キャリア選択による意思決定 ⑤方策の実行 ⑥職業適応の、①から③の段階ともいえる重要な部分です。進路相談では、生徒が繰り返し考えられるような言葉かけを大切にしたいと思います。



『新版キャリアの心理学【第2版】
—キャリア支援への発達のアプローチ—』
渡辺三枝子 著 ナカニシヤ出版

キャリアカウンセリングの基礎的な理論として、ジェラットを含め9人の代表的研究者の理論とその背景などを解説。

<例えば、こんなやりとりへ>

生徒：成績が下がっちゃって、部活なんかしているからだって親が…。
先生：成績が下がったのを、部活のせいにしてしまったんだね。
生徒：そうなんですよ。それに、いい加減、受験勉強に切り替えたほうがいいから、部活を辞めるように言われて。
先生：部活を辞めれば、受験勉強に打ち込めるようになりそうかな？
生徒：う〜ん、どうかなあ…。せっかくみんなでがんばってきたし、あと半年で引退だからみんなと一緒に引退したいし。
先生：そうか。じゃあ、まずは、部活を続けた場合と辞めた場合の、それぞれメリット・デメリットをたくさん書き出したり、部活で本当に勉強時間がとれないのかどうか生活時間の見直しをしてみようか。あと、成績が落ちたというのは、具体的に何がどう落ちたのか、データを見てみよう。

<例えば、こんなやりとりへ>

生徒：志望校調査なんだけど、どこを書けばいいのか相談したくて。
先生：何か漠然とでも、やってみたいことはあるの？
生徒：う〜ん、特にこれといって勉強したいことがあるわけじゃないし。大学に行くのも、とりえず進学しておいたほうがいいかなくらいだし。
先生：1年生の時、地域の商店街のイベントのお手伝いをクラスでやって、一生懸命資料作りをしていたって聞いたけど？
生徒：ああ、あれね。みんなでお祭りっぽくて楽しかった。
先生：修学旅行の前にも、事前調査をしっかりとっていたよね。
生徒：調査や情報収集したりするの、結構好きなんですよね。

<例えば、こんなやりとりへ>

生徒：先生、どうしよう。この前の模試が悲惨で、このままだとまったく受かる気がしない…。
先生：模試の判定が悪くて不安になっているんだね。
生徒：そう。勉強結構やっていたのに、合格判定が上がるところか、下がってしまって。
先生：勉強はかなりがんばってやっていたんだ。どんなふうに勉強していたの？
生徒：平日は、毎日4時間くらいやって、休日は図書館で朝から夕方までがんばっていたけど…。
先生：ちなみに、特に対策を意識していた教科や範囲はあるのかな？
生徒：えっと〜(と、対策についての具体的な話をしはじめる)